

思い出のウィーン

二川 清

もう三十年以上も昔のことになってしまつたが、オリンピックが東京で開催された昭和

三十九年、当時の私の職場であつた東京都庁の海外研修の制度の適用を受けて、六カ月間をアメリカのフィラデルフィアで過ごしたことがある。日本への帰路、ほぼ二週間をかけて、パリ、ロンドン、ウィーン、ミラノ、ロー

ーマと巡り、まだ一般の観光旅行は不可能な時代であつたが、当時のヨーロッパの雰囲気

をかなりたつぷりと味わうことができた。なかでも四日ばかり滞在したウィーンの街の優雅な佇まいが最も深く印象に残り、いつの日かは再訪したいと思ひ続けていたのであるが、職場ではだんだん束縛が増加してゆ

もなかつたので、長い間それは単なる夢でしかなかつた。

都を退職してから十年余、第二の人生の計画もどうやら軌道に乗り、心の余裕もできて、その上近年海外旅行が著しく安価に可能になつたこともあつて、ウィーン再訪計画が三十年ぶりで昨年やつと実現した。

冬期の手頃な価格のツアーという誘い水もさることながら、当時の滞在の三日間、毎晩通つた国立歌劇場の舞台の強烈な印象、特にリヒアルト・シュトラウスの『薔薇の騎士』での、シュワルツコプフのウエルデンベルク侯爵夫人の素晴らしさに圧倒され、ウィーンは絶対オペラシーズンでなければという思い

込みがあり、再訪は一月という冬の最中を選んだ。今度は一人旅ではなく妻と娘の三人連れで、シベリアの大地の俯瞰と言う十年ほど前には思ひもよらなかつたらしい眼福に心を奪われながら、フライトの十二時間もあつという間に過ぎてしまい、薄曇りの午後のウィーンに到着した。シェーンブルン宮殿近くのバルクホテルに落ち着いて、夕食に地下鉄で街へ。ウィナーヴァルトという気楽なレストランで、ウィナーシュニッツェルに舌鼓を打つ。一人では食べ切れないほどの大きさのシュニッツェルがたつぷりのサラダ付きで八百円弱という安さに大満足の夕食であつた。

翌日は抜けるような晴天で、王宮やシユテ

ファン大聖堂などを徒歩で回りながら、超高層ビルの全くない、三十数年前と殆ど変わらぬ落ち着いた街並に一入の感慨を覚えた。三十年前どころかおそらくは百年前、二百年前から殆ど変わっていないのであろう。京都でさえ三十年前と比べると大きく変わってしまったことを思うとちよっと情けない気がした。

夜はフォルクス歌劇場でモーツアルトのオペラ『魔笛』を楽しむ。国立歌劇場よりは少し小振りな劇場だが、日本の劇場の一等席相当の席が三千円とこれも日本では考えられない料金である。

二日目はいよいよ懐かしの国立歌劇場でのオペラである。演目も出発前に調べておいたとおりポイトの『メフィストフェレ』で、このオペラは日本では勿論未上演、ウィーンでも五十年ぶりとのことで、これだけでもわざわざウィーンまで来た値打ちがあるといえる。

三十年前はやはりこの劇場でグノーの『ファウスト』も観たのだが、やはり同じテーマのオペラを同じ劇場で観るのも何かの因縁のような気がした。

法がまかり通るのであろうか。

ポイトはワグナーの影響を大きく受けた作曲家とのことで、分厚なオーケストラの響きが特徴的だが、メロディーは中々に美しく、あまり演奏されないのが不思議である。ウィーンフィルのオーケストラは勿論絶品であるが、コーラスもまた素晴らしく、専属のバレエ団のバレエも楽しい。三十年前は、こウィーンでもミラノ、パリ、ロンドンでもオペラはすべて写実的な舞台装置であったが、今度はシンボリックな美しい装置であった。参考までに料金はS席が二万円、一等席が一万六千円で、我々は一等席であったが、一階の六列目の中央で、日本の歌劇場の場合ならS席に相当するであろう。日本でのオペラの料金に比してかなり安いといえる。ちなみに前から三列目までと二階正面の二列目、それに面白いことに、歌舞伎座でいえば一階の二等席の二列目に相当する席がS席なのである。これは一等席と二等席との間に通路があり、二等席の最前列は前の客が邪魔にならないで見やすいためにS席に格付けされているらしく、ヨーロッパ人の合理性が窺える。

なおこの一万六千円の席が、日本の仲介会社を通して買うと三万数千円に跳ね上がる。日本という国はいつまでもこういうあこぎな商

三日目は昼間はシェーンブルン宮やベルベデー宮、美術史美術館で催されていたブルーゲルの大規模な特別展覧会、街中に散在するウィーン古典派音楽家達の像、ナッシュマルクトの古物市などを訪れ、夜は楽友協会ホールでのウィーン交響楽団の演奏会、メンデルスゾーンの第五交響曲とマーラーの第五交響曲をたっぷり楽しんで、四日間はアツという間に過ぎ、またの訪維を期しつつ古都を後にした。